

### 1 自己評価及び外部評価結果

【事業所概要(事業所記入)】

事業所番号	1890200148		
法人名	福井県医療生活協同組合		
事業所名	和の家 えがお		
所在地	敦賀市公文名1-6		
自己評価作成日	令和 2年11月16日	評価結果市町村受理日	

※事業所の基本情報は、公表センターページで閲覧してください。(↓このURLをクリック)

基本情報リンク先	<a href="http://www.kaigokensaku.jp/18/index.php">http://www.kaigokensaku.jp/18/index.php</a>
----------	---

【評価機関概要(評価機関記入)】

評価機関名	社会福祉法人 福井県社会福祉協議会		
所在地	福井県福井市光陽2丁目3番22号		
訪問調査日	令和 2 年 12 月 9 日		

【事業所が特に力を入れている点・アピールしたい点(事業所記入)】

併設された在宅総合センター和の協力を得ながら運営しています。併設の事業所行事や避難訓練等に参加させてもらったり、馴染みの利用者さんや職員に会いにいたり関係性ができています。入居前に利用されていた方も多いので、顔なじみでありいつも心よく受け入れてくださっています。併設の事務所と合同で避難訓練も実施している。普段より、医療生協の組合員さん宅へ「けんこう」新聞の配布を利用者さんと配るなど地域へ出る機会を持っている。

【外部評価で確認した事業所の優れている点、工夫点(評価機関記入)】

遠くには敦賀の山々や市街が見え、近くには川が流れ田畑や住宅の静かな一角に、事業所は立地している。同敷地内に併設の事業所「在宅総合センター和」があり、連携しながら地域交流に努めている。管理者は「あなたの笑顔がみたいから」という理念を軸に、系統的に職員が実践できるよう指導している。理念を基に年間目標、個人目標があり、各々が実践し評価する過程を書式化することで、職員は理念を基にケアをするという意識を体得して実践している。新型コロナウイルス感染防止のため、参加や活動もままならない状況の中でも、利用者を笑顔にするため、管理者と職員は取り組んでいる。今回の外部評価はオンライン会議システムにより見聞き確認した。

V. サービスの成果に関する項目(アウトカム項目) ※項目No.1~55で日頃の取り組みを自己点検したうえで、成果について自己評価します

項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印		項目		取り組みの成果 ↓該当するものに○印	
56	職員は、利用者の思いや願い、暮らし方の意向を掴んでいる (参考項目:23,24,25)	○	1. ほぼ全ての利用者の 2. 利用者の2/3くらいの 3. 利用者の1/3くらいの 4. ほとんど掴んでいない	63	職員は、家族が困っていること、不安なこと、求めていることをよく聴いており、信頼関係ができている (参考項目:9,10,19)	○	1. ほぼ全ての家族と 2. 家族の2/3くらいと 3. 家族の1/3くらいと 4. ほとんどできていない
57	利用者職員が、一緒にゆったりと過ごす場面がある (参考項目:18,38)	○	1. 毎日ある 2. 数日に1回程度ある 3. たまにある 4. ほとんどない	64	通いの場やグループホームに馴染みの人や地域の人々が訪ねて来ている (参考項目:2,20)	○	1. ほぼ毎日のように 2. 数日に1回程度 3. たまに 4. ほとんどない
58	利用者は、一人ひとりのペースで暮らしている (参考項目:38)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	65	運営推進会議を通して、地域住民や地元の関係者とのつながりが拡がったり深まり、事業所の理解者や応援者が増えている (参考項目:4)	○	1. 大いに増えている 2. 少しずつ増えている 3. あまり増えていない 4. 全くいない
59	利用者は、職員が支援することで生き生きした表情や姿がみられている (参考項目:36,37)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	66	職員は、生き活きと働けている (参考項目:11,12)	○	1. ほぼ全ての職員が 2. 職員の2/3くらいが 3. 職員の1/3くらいが 4. ほとんどいない
60	利用者は、戸外の行きたいところへ出かけている (参考項目:49)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	67	職員から見て、利用者はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない
61	利用者は、健康管理や医療面、安全面で不安なく過ごせている (参考項目:30,31)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない	68	職員から見て、利用者の家族等はサービスにおおむね満足していると思う	○	1. ほぼ全ての家族等が 2. 家族等の2/3くらいが 3. 家族等の1/3くらいが 4. ほとんどできていない
62	利用者は、その時々状況や要望に応じた柔軟な支援により、安心して暮らせている (参考項目:28)	○	1. ほぼ全ての利用者が 2. 利用者の2/3くらいが 3. 利用者の1/3くらいが 4. ほとんどいない				

# 自己評価および外部評価結果

[セル内の改行は、(Altキー) + (Enterキー)です。]

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
<b>I. 理念に基づく運営</b>					
1	(1)	○理念の共有と実践 地域密着型サービスの意義をふまえた事業所理念をつくり、管理者と職員は、その理念を共有して実践につなげている	入職時には研修ファイルでえがおの理念や身体拘束についてオリエンテーションを行っている。えがおの理念を玄関に掲げ、入居者だけでなく職員も笑顔になれるように日々コミュニケーションを通して実践につなげている。	理念を基に年間目標を立てている。管理者は、常に職員が年間目標を意識した行動をとるよう、業務日誌に年間目標を記載し可視化している。更に、年間目標を基に職員の個人目標を立て実践し評価している。	
2	(2)	○事業所と地域とのつきあい 利用者が地域とつながりながら暮らし続けられるよう、事業所自体が地域の一員として日常的に交流している	今年度は新型コロナウイルスの影響で地域行事や活動がほぼ中止となっている。その中でも3密を守りながら地区の方との交流を続け、地域に根付いた施設になるよう努めて行きたい。	地域のどんど焼きに参加していた。しかし、コロナ禍により参加ができな中で、ハロウィンに保育園児と利用者との交流を実施した。お互いの事業所が感染防止対策を図った上で交流を行うことができた。	
3		○事業所の力を活かした地域貢献 事業所は、実践を通じて積み上げている認知症の人の理解や支援の方法を、地域の人々に向けて活かしている	年3回を目安に発行している新聞にて施設での取り組みについて発信をしている。コロナ禍において地域訪問は難しく今後は工夫をこらした繋がりが必要と感じている。		
4	(3)	○運営推進会議を活かした取り組み 運営推進会議では、利用者やサービスの実際、評価への取り組み状況等について報告や話し合いを行い、そこでの意見をサービス向上に活かしている	2か月に1回の会議について、4・6・8月は書面での開催となった。内容として活動内容やアクセント等について報告をしている。参加者に意見をいただき、サービスの向上や職場作りに繋げている。議事録については職員にも回覧している。	運営推進会議構成員について、管理者は家族、地区関係者、市職員だけでなく、色々な機関(別法人の介護事業所、消防署等)にも声をかけ、事業所との繋がりを密にする計画の基、努力している。	運営推進会議において、自己評価、目標達成計画を議題に挙げ、様々な参加者から意見を求め、出された意見をサービス向上に繋げることを期待します。
5	(4)	○市町村との連携 市町村担当者と日頃から連絡を密に取り、事業所の実情やケアサービスの取り組みを積極的に伝えながら、協力関係を築くよう取り組んでいる	日々普段のわからない事などは相談、アドバイスをいただく事がある。コロナ禍で市から委託を受けた介護相談員の方が定期的に訪問される事が出来なくなっている。	運営推進会議に出席した市職員と取り組み状況を共有し、相談やアドバイスを受け改善を行うとともに、その経過を記録している。コロナ禍で市から委託を受けた介護相談員とは電話で様子のやり取りをしている。	
6	(5)	○身体拘束をしないケアの実践 代表者及び全ての職員が「指定地域密着型サービス指定基準及び指定地域密着型介護予防サービス指定基準における禁止の対象となる具体的な行為」を正しく理解しており、玄関の施錠を含めて身体拘束をしないケアに取り組んでいる	身体拘束適正化委員会を設けている。多職種と意見交換を行い、委員会の内容を職場職員とも共有し拘束がなくなるよう取り組みを行っている。事業所内で学習会を行い身体拘束に対する理解を深めている。	4点柵と玄関の施錠をしている。職員は所定の様式による記録を通して、カンファレンスで検討し、ケアを見直し、4点柵解除に向けて、日々努力を行っている。管理者は、学習会や身体拘束適正委員会を活かして、更に身体拘束をなくそうと意識を高めている。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
7		○虐待の防止の徹底 管理者や職員は、高齢者虐待防止関連法について学ぶ機会を持ち、利用者の自宅や事業所内での虐待が見過ごされることがないように注意を払い、防止に努めている	虐待に関しては内部研修資料に基づいて伝達学習を行っている。今まで通り日々の関わりの中で気になる言動については直接声掛けを行っている。		
8		○権利擁護に関する制度の理解と活用 管理者や職員は、日常生活自立支援事業や成年後見制度について学ぶ機会を持ち、個々の必要性を関係者と話し合い、それらを活用できるよう支援している	管理者が成年後見人制度の研修会に参加し、職場職員に資料の回覧を行っている。現在、成年後見人を利用している入居者が1名おり、用事がある際は連絡を取り合っている。		
9		○契約に関する説明と納得 契約の締結、解約また改定等の際は、利用者や家族等の不安や疑問点を尋ね、十分な説明を行い理解・納得を図っている	契約時には、契約書に沿って内容を説明している。その都度、家族の聞きたい事を尋ねながらすすめている。具体的な例を出して説明するなどして理解いただけるように努めている。		
10	(6)	○運営に関する利用者、家族等意見の反映 利用者や家族等が意見、要望を管理者や職員ならびに外部者へ表せる機会を設け、それらを運営に反映させている	今年度も他の事業所と比較ができる「はがき式のアンケート」を実施している。家族と面会時や電話がけの際はこちらでの様子を伝えながら、家族の要望を聞くように努めている。	新型コロナウイルス感染防止のため、家族の面会を制限する中、毎月の手紙には利用者状況がわかる写真を多く同封している。また、家族から「職員のことが知りたい」という要望を受け、職員の自己紹介も同封するようになる。	
11	(7)	○運営に関する職員意見の反映 代表者や管理者は、運営に関する職員の意見や提案を聞く機会を設け、反映させている	月1回のペースで職場内の会議を設けている。事前に運営について会議を設ける事で活動内容・入居者についての状況も含めより具体的に話せるようにしている。身体拘束についてや当月立案のケアプラン内容についても意見をいただいている。	事業所内をもっときれいにしたいという職員の提案から、業務日誌に清掃のチェック欄を作成した。職員が日中・夜間と清掃した後チェックすることで、衛生面の充実化を図ることに繋がっている。	
12		○就業環境の整備 代表者は、管理者や職員個々の努力や実績、勤務状況を把握し、給与水準、労働時間、やりがいなど、各自が向上心を持って働けるよう職場環境・条件の整備に努めている	管理者から職員の状況も含め、えがおの現状を代表者に伝えている。看取りや入退居があり、代表者も現場の様子を見に来られている。		
13		○職員を育てる取り組み 代表者は、管理者や職員一人ひとりのケアの実際と力量を把握し、法人内外の研修を受ける機会の確保や、働きながらトレーニングしていくことを進めている	法人内の研修を年1回受けている。研修では社会情勢を学ぶ機会にもなっている。コロナ禍で外部研修ができなくWEB学習に力を入れている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
14		○同業者との交流を通じた向上 代表者は、管理者や職員が同業者と交流する機会を作り、ネットワークづくりや勉強会、相互訪問等の活動を通じて、サービスの質を向上させていく取り組みをしている	福井県グループホーム協議会に加入しているが、コロナ禍で地域密着施設間の交流や研修が中止となっている。同業者の新しい建物の内覧会に招待をされ参加をしている。		
<b>II. 安心と信頼に向けた関係づくりと支援</b>					
15		○初期に築く本人との信頼関係 サービスを導入する段階で、本人が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、本人の安心を確保するための関係づくりに努めている	毎月、各担当がモニタリングを実施している。運営会議や部会(会議)などを通して入居者の状態を共有し、一人一人にあったケアやコミュニケーション作りに努めている。		
16		○初期に築く家族等との信頼関係 サービスを導入する段階で、家族等が困っていること、不安なこと、要望等に耳を傾けながら、関係づくりに努めている	コロナ禍で面会の制限を設けている。その分電話での連絡を増やし、毎月写真付きのお手紙を配布するなどして関係づくりに努めている。		
17		○初期対応の見極めと支援 サービスを導入する段階で、本人と家族等が「その時」まず必要としている支援を見極め、他のサービス利用も含めた対応に努めている	今後どのような支援が必要か職場職員や看護師等他職種に入ってもらい話し合い、状態や状況を家族へお伝えしている。高齢な方が多く、看取りについてどうすべきか家族へ意思確認を定期的に行っている。		
18		○本人と共に過ごし支えあう関係 職員は、本人を介護される一方の立場におかず、暮らしを共にする者同士の関係を築いている	えがお内での入居者1人1人の「役割」を考え、職員と入居者が共同しての生活を進めている。職員と入居者が信頼関係を築けるよう、寄り添いコミュニケーションをはかっている。		
19		○本人を共に支えあう家族との関係 職員は、家族を支援される一方の立場におかず、本人と家族の絆を大切にしながら、共に本人を支えていく関係を築いている	コロナ禍で難しい面があったが、面会制限の中で訪問時に家族と交流できる場を提供している。日々の変化については、気になる事があれば電話でお伝えしている。		
20	(8)	○馴染みの人や場との関係継続の支援 本人がこれまで大切にしてきた馴染みの人や場所との関係が途切れないよう、支援に努めている	入居前に利用されていた、併設の他事業所の職員や友人に会う機会がコロナ禍で難しくなっている。入居者の認知症が進行しないよう施設内で楽しく過ごせるような色々な企画を考え実行している。	コロナ禍により、家族の面会を制限していたが、市職員から、国の通知と他の事業所状況の助言を受け、感染防止対策をした上で、面会環境整備に取り組み、現在は実施している。	

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
21		○利用者同士の関係の支援 利用者同士の関係を把握し、一人ひとりが孤立せずに利用者同士が関わり合い、支え合えるような支援に努めている	1人1人が楽しめるよう支援している。料理作りでは職員が間に入る事で入居者同士が協力して行えるよう心掛けている。		
22		○関係を断ち切らない取組み サービス利用(契約)が終了しても、これまでの関係性を大切にしながら、必要に応じて本人・家族の経過をフォローし、相談や支援に努めている	看取りを行った家族様と会う機会があり最近の出来事についてお話をする機会があった。又、退居された入居者家族より毎年お米を善意で頂くなど、交流が続いている。		
<b>Ⅲ. その人らしい暮らしを続けるためのケアマネジメント</b>					
23	(9)	○思いや意向の把握 一人ひとりの思いや暮らし方の希望、意向の把握に努めている。困難な場合は、本人本位に検討している	入居者本人がどうしたいか話を聞き、なるべく希望が叶うよう努めている。難しい場合は代替案など模索している。	新規利用者には、今までの暮らしぶりがわかる「私の暮らしシート」を1か月かけて作成する。そのシートから思いや意向を把握し、1日のリズムや帰宅願望などの理由を可視化し、ケアプランに活かしている。	
24		○これまでの暮らしの把握 一人ひとりの生活歴や馴染みの暮らし方、生活環境、これまでのサービス利用の経過等の把握に努めている	新しい入居者に対しては利用されていたサービス事業所に聞き取りを行い、本人の過ごしやすい生活スタイルに合うように努めている。その後はモニタリングやアセスメントを通して変化する生活スタイルに対応をしている。		
25		○暮らしの現状の把握 一人ひとりの一日の過ごし方、心身状態、有する力等の現状の把握に努めている	1日1日の変化を見逃さないよう、職員同士で情報の共有に努めている。変化があれば支援方法の検討などを行っている。		
26	(10)	○チームでつくる介護計画とモニタリング 本人がより良く暮らすための課題とケアのあり方について、本人、家族、必要な関係者と話し合い、それぞれの意見やアイデアを反映し、現状に即した介護計画を作成している	担当職員が毎月モニタリングを行い、現状に合っているか確認をしている。入居者本人や家族の意見も取り入れ、職場会議を通して介護計画を見直し作成している。	利用者個々の毎日の「経過記録シート」に支援サービス内容を記載し、常にそれに沿った支援を記録する意識づけをしている。職員は研修計画を立てて実施し、内容をまとめて伝達研修をする取り組みを行い質向上に努めている。	
27		○個別の記録と実践への反映 日々の様子やケアの実践・結果、気づきや工夫を個別記録に記入し、職員間で情報を共有しながら実践や介護計画の見直しに活かしている	入居者経過記録の様式変更を行い、より介護計画に沿って行われているか確認しやすいように改善している。情報共有した内容を職場会議で話し合い、ケアの実践や見直しの検討に活かしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
28		○一人ひとりを支えるための事業所の多機能化 本人や家族の状況、その時々生まれるニーズに対応して、既存のサービスに捉われない、柔軟な支援やサービスの多機能化に取り組んでいる	入居者本人や家族状況の変化、社会情勢にともない受診支援などを行っている。入居者の近況が伝わりやすいように受診時は情報提供書を作成している。		
29		○地域資源との協働 一人ひとりの暮らしを支えている地域資源を把握し、本人が心身の力を発揮しながら安全で豊かな暮らしを楽しむことができるよう支援している	コロナ禍で地域との交流が難しい状況であったが、関係性が途絶えぬように新聞を発行したり努めている。社会情勢を見ながら、感染対策をして地域活動に参加できるようにしていきたい。		
30	(11)	○かかりつけ医の受診支援 受診は、本人及び家族等の希望を大切に、納得が得られたかかりつけ医と事業所の関係を築きながら、適切な医療を受けられるように支援している	入居者本人や家族の希望を優先してかかりつけ医を決めていただいている。高齢などを理由に受診から往診してもらえらるる病院へ変更する事があった。	コロナ禍における受診には、電話だけでなく、利用者の写真や動画をつけた情報提供書を作成している。家族には受診の結果を電話や手紙などで伝えている。5人の利用者の調剤薬局薬剤師が来訪している。	
31		○看護職との協働 介護職は、日常の関わりの中でとらえた情報や気づきを、職場内の看護職や訪問看護師等に伝えて相談し、個々の利用者が適切な受診や看護を受けられるように支援している	週2日定期で看護師が訪問している。日々の状態や不安な面など相談し個々のケアが適切に行えるようにアドバイスを頂いている。又、メールや電話で受診結果などを共有している。緊急時や夜間について対応できるような体制がとれている。		
32		○入退院時の医療機関との協働 利用者が入院した際、安心して治療できるように、又、できるだけ早期に退院できるように、病院関係者との情報交換や相談に努めている。あるいは、そうした場合に備えて病院関係者との関係づくりを行っている。	コロナ禍で入院中は面会制限があった。状態が安定したら早期に退院できるよう地域連携室や家族と密に連絡をとれるよう対応している。		
33	(12)	○重度化や終末期に向けた方針の共有と支援 重度化した場合や終末期のあり方について、早い段階から本人・家族等と話し合いを行い、事業所のできることを十分に説明しながら方針を共有し、地域の関係者と共にチームで支援に取り組んでいる	担当者会議の際、事前意思確認書を用いて終末期についての話を行っている。今後も入居者本人、家族、かかりつけ医、看護師、職場職員と1つのチームとして支援に取り組んでいきたい。	事業所は、医師、看護師と連携を図り、3回看取りの経験をしている。その経験を振り返りシートに記入し、共有のため職員に回覧した。管理者は、終末期を迎える利用者、家族へのケアの充実に向けて、看取り研修を年2回実施している。	
34		○急変や事故発生時の備え 利用者の急変や事故発生時に備えて、全ての職員は応急手当や初期対応の訓練を定期的に行い、実践力を身に付けている	毎年救急法を実施。今年はWEB学習を通じて緊急時対応の連絡体制や看護師への状況説明についてを学ぶ機会を持った。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
35	(13)	○災害対策 火災や地震、水害等の災害時に、昼夜を問わず利用者が避難できる方法を全職員が身につけるとともに、地域との協力体制を築いている	定期的に併設事業所と合同火災避難訓練を実施している。えがお独自でも夜間想定火災避難訓練を行い、マニュアルを確認している。2019年は民生員さんにも参加をして頂いていた。	管理者は、地区の「防災マップづくり」に参加している。法人本部を中心にした全体管理者会議で災害対策を練り、災害に備えて訓練や備蓄をしている。	事業所のある地域は、河川が合流する位置にある。事業所が敦賀を拠点としたチームづくりをし、新たなハザードマップを基に消防署など関係者を含めて災害対策を話し合い防災計画を作成することを期待します。
<b>IV. その人らしい暮らしを続けるための日々の支援</b>					
36	(14)	○一人ひとりの尊重とプライバシーの確保 一人ひとりの人格を尊重し、誇りやプライバシーを損ねない言葉かけや対応をしている	入居者自身で自己決定できる取り組みや工夫をして、利用者の尊厳に配慮した言葉遣いをするように心掛けている。	プライバシーポリシーを玄関に掲げ、本部や事業所内で学習会を行っている。職員からは、認知症を学び尊重する姿勢を理解しなければ、ケアが向上しないと発言があった。	
37		○利用者の希望の表出や自己決定の支援 日常生活の中で本人が思いや希望を表したり、自己決定できるように働きかけている	日々の会話からその方の思いや希望を聞き出すように心がけている。うまく表現出来ない入居者については表情などを観察し、自己決定出来るように努めている。		
38		○日々のその人らしい暮らし 職員側の決まりや都合を優先するのではなく、一人ひとりのペースを大切に、その日をどのように過ごしたいか、希望にそって支援している	「その人らしく」を大切にし見守りを行っている。入居者の意志や希望を確認し支援している。必要時は職員の休憩時間ずらすなどして対応している。		
39		○身だしなみやおしゃれの支援 その人らしい身だしなみやおしゃれができるように支援している	コロナ禍であまり外出が出来ないが、施設内でも入居者の主張を尊重し、身だしなみやおしゃれを楽しめるよう支援している。		
40	(15)	○食事を楽しむことのできる支援 食事が楽しみなものになるよう、一人ひとりの好みや力を活かしながら、利用者と職員と一緒に準備や食事、片付けをしている	入居者とコミュニケーションをとる中で好きな物や食べたい物を聞き出し、ひと月に数回実施している食事やおやつ作りの際に取り入れて企画をしている。	ソーシャルディスタンスをとった利用者の食事風景を画像で確認した。このような状況の中だが、食事を月に2~3回、おやつは月に6~7回、職員と一緒に作り、利用者が楽しめる支援をしている。	
41		○栄養摂取や水分確保の支援 食べる量や栄養バランス、水分量が一日を通じて確保できるよう、一人ひとりの状態や力、習慣に応じた支援をしている	食事や水分摂取量が少ない入居者が少しでも多く摂取していただけるよう、好みの食材や温度、容器等を提供をしている。		

自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
42		○口腔内の清潔保持 口の中の汚れや臭いが生じないよう、毎食後、一人ひとりの口腔状態や本人の力に応じた口腔ケアをしている	職員が口腔セットの準備を行う事で一人一人が混乱しないよう行っている。介助への抵抗や理解が出来ない入居者については受け入れやすいタイミングを見計らって対応している。		
43	(16)	○排泄の自立支援 排泄の失敗やおむつの使用を減らし、一人ひとりの力や排泄のパターン、習慣を活かして、トイレでの排泄や排泄の自立にむけた支援を行っている	排泄表を使用する事で排泄パターンの把握が行えている。入居者それぞれに合った排泄支援が行えるように職員間で情報共有を行っている。	業務日誌には、すべての利用者の排泄に関する情報(伝達事項、水分量、尿便の排泄状況、薬剤など)を記入している。全職員が情報を共有しながら、排泄支援に取り組んでいる。	
44		○便秘の予防と対応 便秘の原因や及ぼす影響を理解し、飲食物の工夫や運動への働きかけ等、個々に応じた予防に取り組んでいる	頓服の下剤だけに頼らず、なるべく水分を多く摂ってもらうよう心掛けている。又、日々の体操へ参加を促し、牛乳等を利用して便秘予防を行っている。		
45	(17)	○入浴を楽しむことができる支援 一人ひとりの希望やタイミングに合わせて入浴を楽しめるように、職員の都合で曜日や時間帯を決めず、個々にそった支援をしている	週2~3回を目安に入浴して頂けるように入浴確認表を利用し入浴状況を把握している。入居者には無理強いをせず、入居者の希望や状況に合わせて変更を行っている。	利用者一人ひとりがゆっくり入浴できる家庭的な雰囲気、浴室・脱衣室は清潔感ある空間である。車いすの利用者も、入浴が楽しめるように支援している。	
46		○安眠や休息の支援 一人ひとりの生活習慣やその時々の状況に応じて、休息したり、安心して気持ちよく眠れるよう支援している	本人の状態や希望に合わせて日中でも休息する為に臥床時間を設けるようにしている。安心して気持ちよく眠れるように居室環境にも気を付けて支援している。		
47		○服薬支援 一人ひとりが使用している薬の目的や副作用、用法や用量について理解しており、服薬の支援と症状の変化の確認に努めている	入居者症状の変化に注意し主治医、看護師、薬局との情報共有を行っている。内服変更時は特に経過観察を行い職員間で情報共有を行っている。		
48		○役割、楽しみごとの支援 張り合いや喜びのある日々を過ごせるように、一人ひとりの生活歴や力を活かした役割、嗜好品、楽しみごと、気分転換等の支援をしている	1人1人の趣味や生活歴を把握し、無理強いはせずに日々の日課へ繋がるような働きかけを行っている。又、楽しみに繋がるように一人ひとり違う嗜好品を情報をもとに提供している。		



自己	外部	項目	自己評価	外部評価	
			実践状況	実践状況	次のステップに向けて期待したい内容
49	(18)	○日常的な外出支援 一人ひとりのその日の希望にそって、戸外に出かけられるよう支援に努めている。又、普段は行けないような場所でも、本人の希望を把握し、家族や地域の人々と協力しながら出かけられるように支援している	コロナ禍で外出や家族との面会に制限を設けている。天気の良い日はドライブに出掛けたり外で体操をし気分転換をはかる支援を行った。2019年は施設内忘年会でご家族を招待した。	気軽に外出できない状況の中、事業所内で季節を感じられるように雰囲気づくりに努めたり、天気の良い日には近場の散歩、外に椅子を出しての体操など実施している。また、新型コロナウイルス感染防止対策を講じて、三方五湖までのドライブを実施している。	
50		○お金の所持や使うことの支援 職員は、本人がお金を持つことの大切さを理解しており、一人ひとりの希望や力に応じて、お金を所持したり使えるように支援している	個人の財布があり事業所で預かっている。コロナ禍で例年に比べ入居者と一緒に買い物へ出掛けたり、移動スーパーでの買い物が出来なかった。		
51		○電話や手紙の支援 家族や大切な人に本人自らが電話をしたり、手紙のやり取りができるように支援をしている	コロナ禍のため家族との面会に制限を設けている。認知症の進行から電話だけの交流は難しくなっている。職員が毎月写真付き手紙を送付、日々の変化についてお伝えしている。		
52	(19)	○居心地のよい共用空間づくり 共用の空間(玄関、廊下、居間、台所、食堂、浴室、トイレ等)が、利用者にとって不快や混乱をまねくような刺激(音、光、色、広さ、温度など)がないように配慮し、生活感や季節感を採り入れて、居心地よく過ごせるような工夫をしている	職員による毎日の清掃、定期的な業者のワックスがけできれいな空間作りを心掛けている。食堂の共用空間には季節の飾りつけを行い季節が感じられるよう努めている。	共有空間の壁には季節の飾り物、保育園児の贈り物の壁紙が展示している。そして、ゆったりとした広さのある食事テーブルに利用者が座り、テレビを視聴している。居心地よく過ごせるよう工夫した空間を見聞きた。	
53		○共用空間における一人ひとりの居場所づくり 共用空間の中で、独りになれたり、気の合った利用者同士で思い思いに過ごせるような居場所の工夫をしている	食堂のソファは誰でも誰とでも自由に座れるよう設置をしている。入居者の状態変化や新しい入居者が来る際は職員間で話し合い座席配置を考えトラブルにならないよう配慮をしている。		
54	(20)	○居心地よく過ごせる居室の配慮 居室あるいは泊まりの部屋は、本人や家族と相談しながら、使い慣れたものや好みのものを活かして、本人が居心地よく過ごせるような工夫をしている	新しく入居された際には、本人や家族と相談を行い使い慣れた家具を居室に置く様にしている。入居者が居心地よく過ごせるよう週1回居室内を掃除する日を決め、衛生面に配慮している。	読書好きな利用者の居室には多数の本が置かれている。また、利用者の自尊心が維持できるようにポータブルトイレに部屋にマッチしたカバーを設置している。居心地よく過ごせる配慮を見聞きた。	
55		○一人ひとりの力を活かした安全な環境づくり 建物内部は一人ひとりの「できること」「わかること」を活かして、安全かつできるだけ自立した生活が送れるように工夫している	職場会議にて情報共有を行い、個々の状態を把握した上で安全に気を付けてできる事は本人にさせていただき、いつまでも自立した生活が安心して送れるように支援を行っている。		